上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

PRESS RELEASE
上智大学 SOPHIA UNIVERSITY
〒102-8554　東京都千代田区紀尾井町 7-1
www.sophia.ac.jp

2016 年 4 月 22 日

報道関係各位

アンコール・ワット西参道修復工事いよいよ着工いたします。

上智大学アンコール遺跡国際調査団がアプサラ機構と協力して行うアンコール・ワット西参道修復工事（第２期）は、外務省の政府開発援助（ＯＤＡ）の支援受け、いよいよ着工いたします。ついては、以下のとおり起工式を執り行いますので、ご案内申し上げます。

Ⅰ．起工式(第2期)について

◇主催者:上智大学(アジア人材養成研究センター)
　　カンボジア王国国立アンコール地域遺跡整備機構(略称:アプサラ機構)
会　場:カンボジア王国シェムリアップ州シェムリアップ郡ノコール村
　　アンコール・ワット西参道前の仮設式場
日　時:2016 年 5 月 9 日(月) 現地時間:午前 7 時 30 分～9 時 30 分
　　(日本時間: 9 日午前 9 時 30 分～11 時 30 分)

◇式次第(使用言語はカンボジア語と日本語)
仏教僧侶による読経
両国国旗掲揚および国歌斉唱
開会の辞　アプサラ機構総裁　Sum Map 閣下

◇式　辞
アンコール・ワット西参道を修復する上智大学・アプサラ機構の共同工事について(仮題)
　　カンボジア王国政府第一副首相 Sok An 閣下
カンボジアと日本の文化交流について(仮題)
　　日本国特命全権大使　隈丸優次閣下
アンコール・ワットとソフィア・ミッション(仮題)
　　学校法人上智学院理事長　高祖敏明教授
アンコール・ワット修復を通じてカンボジアと日本の技術交流(仮題)
　　アプサラ機構遺跡局長　Ly Vanna 博士

祝　辞:シェムリアップ州知事閣下
お祝い奉納古典舞踊　アプサラ・ダンス　カンボジア宮廷舞踊団

◇主な出席予定者
〈カンボジア王国政府〉
カンボジア王国政府第一副首相　Sok An 閣下
カンボジア王国政府文化芸術省大臣閣下(予定)
カンボジア王国シェムリアップ州知事閣下

〈日本国側〉

日本国特命全権大使　隈丸優次閣下

元大使　篠原勝弘閣下

前大使　黒木雅文閣下（予定）

独立行政法人国際交流基金理事長　安藤裕康（予定）

学校法人上智学院理事長・上智大学教授　高祖敏明

上智大学アジア人材養成研究センター所長・教授　石澤良昭

上智大学アジア人材養成研究センター客員教授（日本大学名誉教授）　平山善吉

上智大学アジア人材養成研究センター研究員（アンコール建築史学）　三輪悟

上智大学アジア人材養成研究センター研究員（アンコール遺跡環境学）　ラオ・キム・リアン

Ⅱ．アンコール・ワット西参道とは何か（地図参照）

(1) アンコール・ワットの入り口参道であり、陸橋 200m、外から見えるラテライト（紅土）擁壁の内側は土砂版築層、その上に砂岩の敷石を乗せた参道歩道

(2) 西参道の崩壊事例：①1952 年大洪水で擁壁一部崩落と倒壊

②1960 年代フランス極東学院が参道幅 12m の南側半分を修復

③北側半分の工事は内戦のため中止

(3) 西参道は：①創建当時（12 世紀前半）の王が馴象に乗り、行幸するために敷設された道路であり、この参道は正式な入り口

②参道入り口から本殿まで 540mの距離

③参道に塗り込められたヒンドゥー教の篤信装飾装置

A)西参道は 200mの環濠の上を左右に見ながら、天空を歩くごとくの浮き橋建築様式となっている。

B)ナーガ蛇神（水神）の胴体を欄干縁取り、天空の神の世界を歩くが如し。

C)五基の大尖塔（須弥山を模した）を眺め、蛇神欄干に触りながら信仰心を高め、本殿に入っていく。

(4) 参道入口の 9 頭のナーガ神像彫刻は、評価の高い大傑作（現在は復元レプリカ）。邪な心を持った者を一喝する迫力にあふれ、圧巻のアンコール彫刻装飾である。

(5) 上智大学は現地にアジア人材養成研究センターを建設(1996 年)し、保存官等の養成およびカンボジアの歴史・文化・研究・調査し、日・カの学術交流研究拠点とした

(6) 1996 年に着工された西参道（第 1 工区 100m）の修復は、「カンボジア人の手によるアンコール・ワットの修復」を掲げ、カンボジア人保存官候補者に、土木・建築・考古の技能研修を実施しながら、石積みの建築技術を検証し、12 年かかって完成。当時内戦後カンボジア人を元気づける文化復興のシンボルとなる。困難な社会情勢のさなかにあって、2007 年に第1工区 100m が完成した。

Ⅲ．アンコール・ワット技術交流研修委員会の発足（2015 年 3 月）

アンコール・ワット西参道技術交流研修委員会合同委員会が 2015 年 3 月に発足。 これまでに両国の合同委員会が 2015 年 3 月・12 月、2016 年 1 月の3回にわたり日本とカンボジアにおいて開かれた。

技術交流研修日本委員会委員

委 員 長　石澤良昭（上智大学教授）（カンボジア碑刻文学・アンコール史学）

副委員長　平山善吉（日本大学名誉教授）（建築構造力学）

丸井雅子（上智大学教授）（アンコール考古学）

竹田哲夫（リテック・エンジニアリング顧問）（橋梁工学）

清水五郎（日本大学上席研究員）（建築材料学）

腰塚達郎（元清水建設執行役員）（建築安全工学）

柿﨑正義（スマート建築研究所　代表取締役）（建築施工学）
坪井善道（元日本大学教授）（建築工学）
半貫敏夫（日本大学名誉教授）（建築構造力学）
岸　　明（岸エンジニアリング代表）（建築工学）
小島陽子（日本大学　助教）（アジア建築史学）
三輪　悟（上智大学研究員）（アンコール建築修復学）
ラオ・キム・リアン（上智大学研究員）（建築環境学）

技術交流研修カンボジア委員会委員

H.E.Dr.Sum Map アプサラ機構総裁（フランス・リヨン第 2 大学経済学博士）（経済協力論）
H.E. Mr.Seung Kong アプサラ機構副総裁（カンボジア文化省局長から副総裁へ）（教育学）
H.E. Ros Borath アプサラ機構副総裁（フランス政府公認一級建築士）（建築学）
H.E.Dr.Tan Bounsuy アプサラ機構副総裁（農学）
H.E.Mr.Sok Sangvar アプサラ機構副総裁
（オーストラリア・シドニー大学観光学修士）（観光学）
H.E.Dr.Hang Peou アプサラ機構副総裁（水利学）
Dr.Ly Vanna アプサラ機構　アンコール公園内遺跡局長
（上智大学大学院地域研究専攻学術博士）（考古学）
Dr.Chhean Ratha アプサラ機構　アンコール公園外遺跡局長代理
（日本大学大学院理工学研究科建築学博士）（建築学）
Dr.Tin Tina アプサラ機構　国際調査研究資料局　副所長
（上智大学大学院地域研究専攻学術博士）（文化財保存学）
Mr. Tann Sophal アプサラ機構保存局副局長（王立芸術大学考古学部卒業）（考古学）
Mr. Mao Sokny アプサラ機構保存局技官（王立芸術大学建築学部卒業）（建築学）
Mr. An Sopheap アプサラ機構保存局技官（王立芸術大学考古学部卒業）（考古学）

内容確認、ご取材申込みなど報道関係のお問合せ:

上智大学　〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

1)　学校法人上智学院総務局広報グループ長　飯塚　淳
Mail: sophiapr@cl.sophia.ac.jp
Tel: 03-3238- 3179 /Fax: 03-3238-3539

2)　上智大学アジア人材養成研究センター所長・教授　石澤　良昭
Tel: 03-3238-4136/Fax: 03-3238-4138
Mail:yoshia-i@sophia.ac.jp

在カンボジア　上智大学アジア人材養成研究センター（本部）

3)　住所: No.342,Phum Treang, Khum Slokram, Siem Reap City, Cambodia
Tel/Fax: +855-63-964-267　Mail: sac-rhd2@sophia.ac.jp
研究員　三輪　悟（在シェムリアップ）
Mobile: +855-12-834-144
研究員　ラオ・キム・リアン（在シェムリアップ）

＜参考資料＞

アンコール・ワット修復を通じてカンボジアの平和構築に貢献

―自立を助ける人材養成活動 27 年―

Ⅰ．アジア人材養成研究センターの主な活動

1) 西参道国際協力の基本方針は、「カンボジア人による、カンボジアのための、アンコール・ワット修復」、日本の建築技術とカンボジアの伝統技術を習合させ、新しいカンボジア方式の地域密着型修復技法（上智モデル）により修復。遺跡修復保存の分野で肌の色・言葉の壁を突き破り、信頼関係を築き、この「国際協力とは人と人の協力」を実践。

2) ①王立芸術大学（プノンペン）における集中講義　場所：王立プノンペン大学校舎
（期間：1991 年-2013 年）　延べ受講学生約 2,800 名が出席。
②アンコール・ワット（建築技能系）とバンテアイ・クデイ遺跡（考古発掘系）で現場研修
：専門講義は上智大学アジア人材養成研究センター（シェムリアップ）。現場研修はすでに 51 回（1989 年−現在）に及び、考古・建築の保存官候補者（約 540 名）を研修済み。

3) ①保存官候補学位取得プロジェクト：留学生として上智大学大学院（地域研究専攻）に入学し、1997 年から 2009 年まで学位取得者 18 名（博士学位 7 名、修士学生 11 名）にのぼり、英語による学位請求論文により学位取得。帰国後の主な就職先は、アプサラ機構内の局長クラス、大学教授、プノンペン大学副学長、文化芸術省局長など。

②今回のアンコール・ワット西参道共同工事の担当者：下記の3名はアプサラ機構の現職高官であり、文化遺産研究により博士学位を取得（日本語も堪能である）。

i. Dr. Ly Vana 遺跡保存局長（2003 年上智大学大学院博士学位取得）
今回の西参道修復現場の責任者である。

ii. Dr.Tin Tina 法務局次長（2007 年上智大学大学院博士学位取得）

iii. Dr.Chhean Ratta アンコール遠隔地遺跡局次長（日本大学大学院博士学位取得）

4) カンボジア人材養成活動の事例から

(1) アンコール・ワット西参道第 1 期 100m 修復工事の成果（1996 年−2007 年）

①建築技能者養成の現場実習（担当者：日本大学片桐正夫教授、三輪悟研究員）
工期は 12 年、石工養成しながら約 6,000 個の砂岩・ラテライト（紅土）を擁壁に積み込む。総工費約 2 億円。

②カンボジア人保存官の育成：保存官候補者約 30 名、幹部候補生 5 名の技術研修、石工約 25 名、建築技能者を育成し、自前修復・自国研究を目指す。

③建築系現場実習担当教授陣　：　片桐正夫（日本大学）教授（故人）・重枝豊（日本大学）教授・三輪悟（上智大学）研究員・盛合禧夫（東北工業大学）名誉教授・松村吉康（東北工業大学）教授・福田省三（建築文化研究所）所長・崔ビョンハ（日本大学）・小杉孝行（小杉石材店、石材技能者）・古山康行（建築文化研究所）所員・塚脇真二（金沢大学）教授・吉留正人（元大成建設）・藁谷哲也（日本大学）教授・Sam Peou（上智大学、建築）

④NHK「プロジェクトＸ挑戦者たち」番組「アンコール・ワットに誓う師弟の絆」として放映（2001 年 11 月 20 日）：大好評、日本航空機内番組として上映された。

(2) バンテアイ・クデイ遺跡の考古発掘系現場実習の成果と担当教授陣（1989 年－現在）

①担当者：中尾芳治（帝塚山学院大学）教授、上野邦一（奈良女子大学）教授、宮本康治（(財)大阪市文化財協会）研究員、菱田哲郎（京都府立大学）教授、荒樋久雄（故人・上智大学）講師、田畑幸嗣（早稲田大学）准教授、丸井雅子（上智大学）教授

②2001 年にカンボジア人考古学学生実習中に 274 体の仏像を地下の埋納坑から発掘、世紀の大発見といわれ、アンコール王朝史を書き換える物証となった。2010 年にさらに 6 体が地中から発掘され、合計 280 体。2015 年にも 4 体が発掘された。自前発掘作業ができる考古発掘専門家を養成している。

③これら 274 体の仏像は現地「シハヌーク・イオン博物館」で展示・公開されている。

(3) シハヌーク・イオン博物館の建設

カンボジアで唯一の王立仏像常設博物館。イオン㈱名誉会長岡田卓也氏からご寄付いただき、上智大学が建設。発掘された 274 体の仏像を収蔵・展示している。

Ⅱ. アンコール遺跡地域の環境保護：ISO14001 認証取得―ごみゼロ運動（2003－2006）を援助―

1) 上智大学(学外プロジェクト)は、日本品質保証機構と品質保証研究所と協力を得て、「国際標準化機構（ISO）（14001 環境マネジメント）」取得のため、アプサラ機構職員や地域の村人・小学生に対して環境教育を実施し、世界遺産として初めてISO認証を取得した。入場チケットに「ISO14001」取得と明記、認証更新セミナー実施中。

2) センターのラオ・キム・リアン博士は「ISO14001」取得に向けて、カンボジア語の環境問題テキストを作成して、1990 年代から現地環境調査に入り、シェムリアップ川の水質汚染に警鐘を鳴らし、「ISO14001」認証の取得（日本語堪能）を推進した。

Ⅲ. 上智大学が現地にアジア人材養成研究センターを建設（1996 年）

私たちは、ソフィア・ミッションを実施するために、カンボジア現地に鉄骨 2 階建ての研修施設（敷地 4,800 ㎡）を建設し、常駐研究員 2 名（建築家）を配属。建築系・考古系の研修生の研究室、準備室、出土品の収蔵庫、倉庫などを併設。アジアの現場にこうした研究交流拠点を持続し、活動をしている大学は上智大学だけである。日本の大学の中でアジア現地に研究拠点を設置している唯一の大学。天文学が天文台をもつように、東南アジア地域研究のための研究拠点を建設し、地域の文化遺産や多様な社会と民族への共感から国境を越えた東南アジア的アイデンティティの構築に取り組んでいる。

Ⅳ. 何故、上智大学がアンコール・ワットの修復か

―「文化遺産」を介して平和構築活動へ―

(1) ソフィア・ミッションは上智大学の学生・教職員・関係者の奉仕活動である。私たちは「他者のために、他者と共に生きる（Men and Women for Others, with Others）」を建学の精神に掲げ、「他者」であるアジアのカンボジア人のところへ出かけて行って、私たちの方からその隣人となり、「仲間」となって一緒に（人材養成など）奉仕活動を実施している。

(2) 私たちは内戦 24 年間の戦禍に苦しんでいるカンボジアの人たちを見過ごすわけにはいかなかった。カンボジアでは 1970 年から内戦が続き、虐殺が約 150 万人以上に及び、約 200 万人が難民となり、全てを失い、誰もが内戦の混乱にあえいでいた。

(3) 上智大学は 1979 年に新宿の駅頭で「インドシナ難民に愛の手を」の募金活動を開始。難民キャンプを支援し、ボランティアを派遣した。内戦中の 1980 年代から国家再建と文化復興を支援し、勇気づけるため、「アンコール・ワットはカンボジア人の手で保存修復」を提唱し、カンボジアの現場に出かけ、現地に「上智大学アジア人材養成研究センター」（1996 年）を建設した。アンコール・ワットは、平和な時代に建立され、民族の繁栄を物語る石造伽藍である。私たちはアンコール・ワットの修復作業を通じてカンボジアの平和構築に貢献してきた。現場である西参道工事現場では、民族の和解と復活を象徴する若いカンボジア人保存官候補たちが、頑張って第1期工事を完遂した（1996-2007）。

(4) カンボジアは 1993 年王国として再出発することにあたって5大課題に直面した。第1に戦争（内戦）の傷痕からの復興、第2に国際社会への復帰、第3に脱社会主義化と市場経済への移行、第4に民族アイデンティティの再確立（4派に分かれた内戦の和解）、第5に貧困からの脱却であった。上智大学は第 4 課題を手助けするため、アンコール・ワットの修復事業と取り組むこととなった。西参道第1期工事は、同時に、偉大な民族の歴史解明への道につながり、これら 5 大課題に直面している人たちを勇気づけたのである。

(5) シハヌーク前国王は、ソフィア・ミッションが 1980 年代からカンボジアで活動していることに対して、「最初に井戸を掘った人を忘れてはいけない」と上智大学に対して謝意を表された。

センターは、人材養成を通じてアジアの現場でソフィア・ミッションを実践し、現在もカンボジアの仲間と一緒になって、西参道修復に向けてささやかながら奉仕活動を続けている。

今回のアンコール・ワット西参道修復工事（第2期：第2工区・第3工区）は、こうしたカンボジアとの共同事業のソフィア・ミッションを見ていただくと同時に、上智大学大学院で学位を取得したカンボジア人保存官や建築技能者が中心となって共同工事が実施されることを申し添えたい。

Ⅴ. 文化遺産→平和構築→カンボジアの自立を助ける人材養成活動へ

私たちソフィア・ミッションは「カンボジア人の手によるアンコール・ワット修復」活動を呼びかけ実施してきた。24 年間の政治混乱と内戦に対して、民族和解の場と同時に平和構築の場所として、アンコール・ワットの共同修復作業を提案してきた。1996 年からの西参道第1期修復工事の現場ではカンボジア人のアイデンティティ再構築する場となり、民族の歴史と文化を学習して民族の誇りを習得する現場でもあった。

私たちソフィア・ミッションは、結果としてアジアの現場に出かけて行き、文化遺産（アンコール・ワット）の保存修復活動を通じ、和解と平和構築を浸透させ、新カンボジア式の共生社会へ向かう道筋を提案してきた。1979 年の「インドシナ難民に愛の手を」の募金から 35 年の歳月が流れ、カンボジアは立派に復活し、修復作業の中核となるたくさんの人材が育ち、自前修復ができるようになってきた。そして、彼らこそが世界に冠たるカンボジアの偉大な文化遺産の誇りを語り、アンコール・ワットの時代の歴史とその文化を説明できる専門家になることが期待される。

Ⅵ. 文化遺産国際協力の上智モデル案：

1) アジア現地へ出かけて行って友人となって奉仕活動を開始し、人材の育成に協力
2) 現場研修により伝統技法と現地に適した新技術を開発。地元研究者と共に修復・調査・研究の活動が地域社会の発展に寄与する
3) 学位取得者たちが自前発掘・自前修復・自国研究に向けて挑戦
4) 新しい保存官たちがその研究調査成果を国内外に発表（仏像発掘の大発見など）
5) 文化遺産修復活動はカンボジアの学術レヴェルを国際水準へ引上げる効果あり
6) 文化遺産は民族のアイデンティティ（独自性）の手懸を呈示してくれる歴史の証人
7) 文化遺産修復による歴史の解明は、民族的誇りをその民族に与え、社会的・文化的な波及効果が大きい。

以　上